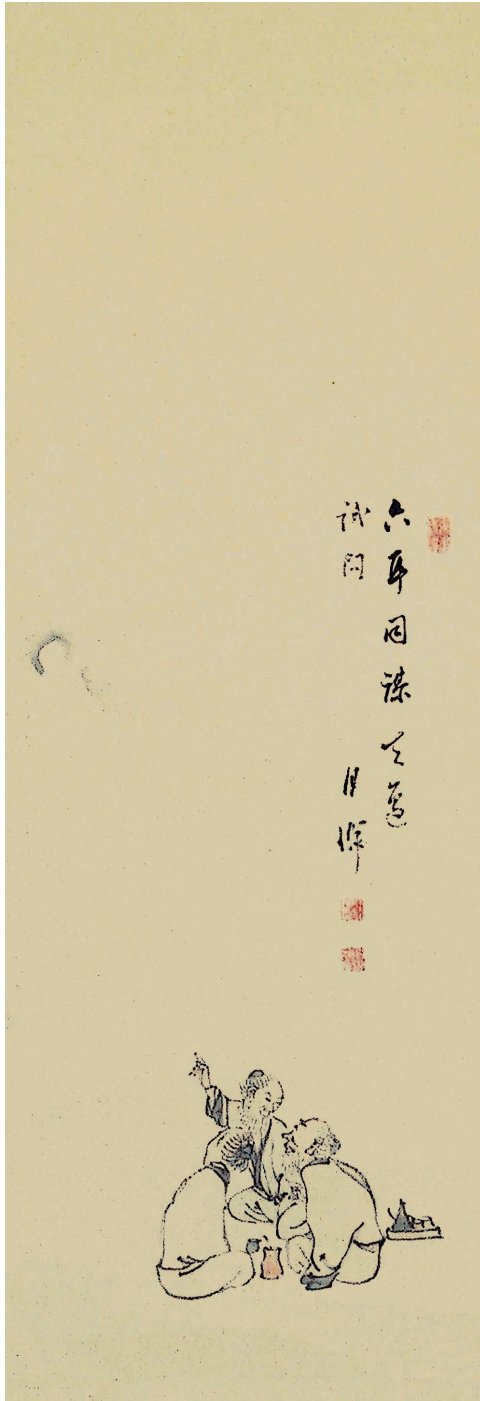


〈館藏資料紹介〉

月儂筆 紙本天辺試問図 (御厨加藤家旧蔵) 本地八八・二種×二八・七種



六耳同謀天邊試問 月儂

「六耳同謀天辺試問」との賛文のもとに、三人の人物が煎茶を和氣藹々のもとに喫しながら、うちの一人が月を指さし、他の二人も月を眺めているさまを、月僊は軽やかな筆さばきで淡彩のもとに描き出している。この図の賛にある「六耳同謀」とは「六耳謀ごとを同じくせず」即ち六つの耳、三人では秘密を保つて計略をなしとげることが困難であるという成語になぞらえて、三人ともども仲睦しく語らっているが、その一人ひとりの心中を天辺（ここでは月）に試問してはとの情景を画したものである。

月僊（一七四一〜一八〇九）は江戸中・後期の画僧で、名は玄瑞、字は玉成・月僊・寂照主人などを号し、尾張国に生まれた。名古屋円輪寺開通上人について出家し、江戸増上寺に入り定月大僧正に師事して、月の一字を受けた。このころ画を学び、のち京都に移って円山応挙に就き、また与謝蕪村の影響も受けた。三十四才のとき伊勢国宇治山田の荒廢していた寂照寺を再興している。文化六年（一八〇六）寂照寺で没した。享年六十九、月僊の得意とした速い渴筆を駆使した独自の群像表現は、この図にも端的によく表現されている。

（翻刻解題 宇野茂樹）